

聖書:エペソ人への手紙4章7～13節

説教:一人の成熟した大人になる

はじめに

いま世の中は、自分だけよければよいという考え方に傾き、一つになることがますます難しくなっています。心ある人たちは、平和を取り戻すためにはどうしたらよいかと心を痛めています、だれも有効な解決策を見いだせないままです。そんな時代のなかであって、聖書はどのようなことを語っているのでしょうか。

前回のところを振り返ります。神に召されて救われた者たちは、クリスチャンとしてふさわしく、愛をもって互いに耐え忍び、御霊による一致を熱心に保ちなさいと言われました。平和を取り戻すためには、一致することが大切であることはわかります。でも考え方や価値観が違う人たちが、どのようにしたら一つとなれるのか。今日はそのことを考えてまいります。

1 一つになることの難しさ

たとえば結婚のことを考えてみましょう。だれでも結婚するとき、この人となら幸せになれると思っただけです。ところが時間が経つと、どうして私はこの人と結婚したのだらうと嘆くことがある。世界が平和になるようにと祈りながら、一番身近な夫婦関係がこんな状態です。

もう一つ、スポーツチームを取り上げましょう。チームは優勝という目標に向かって一致しなければなりません、そのために同じユニフォームを着て、選手は将棋のコマのように監督の指示に従い、自分勝手な振る舞いは許されません。聖書でいう一致もこのようなことなのでしょう。もしそうなら息が詰まりそうです。もちろん違います。ではどういうことか。今日はこのことを考えるために、二つのことばに目を留めます。一つ目は「与えた」、二つ目は「量り」、この二つです。

2 与えた

1) 賜物の量りに従って

7節を読みます。「しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました。」多くの方はこの所をこんなふうに理解したのではないか。「キリストが私たちに恵みを与えてくださった。」そのとおりなのですが、では「賜物の量りに従って」、これはなにか。これは少し説明が必要です。

2) 異なる賜物を

これを考えるヒントが11節にあります。「こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」ここで「お立てになりました」と訳しているところは、日本語訳では気がつかないのですが、原文では7節の「与えた」と同じことばが使われている。訳し直すとこうなる。「キリストご自身が、ある人たちを使徒、…として与えた。」

私たちが一致するためには、スポーツチームのように皆が同じにならなければならない。そんなふうには思わないのは大間違い。キリストは私たちがどのように造ってくださったか。みなを牧師としに造ったか。そんなことはない。全員を預言者、あるいは教師に造ったのでもない。キリストは、さまざまな個性をひとりひとりにふさわしく与えてくださった。まずこのことを確認しておきましょう。キリストの教会は、ひとりひとりの個性がいきいきとして輝いていて、それなのに一致している。そういうところだということです。

こんなことをいうと世の人たちは首をかしげるはず。学校では「個性豊かな児童を育てる」といいつつも、少しばかり個性が強い子どもは学校に居場所を見つけないのが難しい。結局不登校になって、本人も親も悩むことになる。そういう現実があります。

教会はどのようにして一致するのでしょうか。そのことを見ていく前に8節に触れておきます。

3) 天に上ったとき

「そのため、こう言われています。『彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。』」これは詩篇68篇18節からの引用で、少し説明が必要です。たとえばプロ野球チームが優勝すると町のなかをパレードをして、スーパーやデパートでは優勝記念セールが行われます。旧約聖書の時代にも、戦争に勝つと王さまは敵の捕虜を連れてパレードをし、人々に贈り物をするという習慣がありました。天から降られたイエス・キリストは十字架で死んでくださいましたが、三日目によみがえられ、天に上げられました。このようにして死に勝利したキリストは、優勝

パレードをして、人々に贈り物を与えられた。それが賜物と呼ばれるもので、言い換えれば、その人にしかない性格や個性、能力、人格を与えてくださった。これが8節のいっていることです。

でもこんなことを思うわけです。ほかの人はああいうことができるのに、どうして私にはできないのか。こんなふうにと比べて一喜一憂する。なぜ自分が人と違うのか。それはわかりません。わかることは、神さまは私たちひとり一人を違うものとして造ってられ、個性を豊かに与えてくださった。これが「与えた」ということの意味です。

3 量り

1) 成熟した大人へ

次に二つ目の「量り」ということばを見ていきます。そこで13節を読みます。「私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」ここに「量り」ということばがないのに、どうして13節を読んだのか。その理由はこの後で説明します。

その前に確認しておくべき事が二つあります。一つ目は、私たちはまだ大人ではないということです。それで二つ目。いまは大人ではないけれど、成長の途上にあつて、やがて成熟した大人になり最終的にはキリストと等身大の大きさになる。そのようなプロセスの中にいるのだということです。

これはよい知らせです。私たちが一つとなれないという現実がもしあつたとしても、べつに悲観する必要はないということです。まだ大人ではないので未熟なところがあるし、知らないこともたくさんある。できなくて当然です。けれども私たちは悲観しない。というのは、やがて一人の成熟した大人になるという望みがあるから。キリストのお姿はいまははるか遠くにしか見えないけれど、やがて目の前にキリストを見て、同じ背の高さになれるという希望を持ちます。

2) それぞれの分にに応じて

ここでやっとな「量り」ということを考えます。世の中にはいろいろな量りがあります。たとえば、学校であれば生徒の能力を期末試験とか入学試験という量りで量る。スポーツでは時間、高さ、距離を量ります。また世の中には富と名声という量りがあつて、この量りの目盛りが大きければ大きいほど幸せであると、多くの人が思い込んでいます。

では神の量りはどうなのか。7節に「キリストの賜物の量り」とあります。キリストが持っている量

りのことで、この量りでひとりひとりの賜物を量ります。私たちが日常で使う量りは、重さも長さもちゃんと決められていて、全員が同じ量りを使わなければなりません。ところが神さまが使う量りは、この常識が通用しない。ひとり一人に違う量りを使う。ここがポイントです。ところが私たちは、神さまが使う量りはみな同じものだと思い込んでいる。だから多いとか少ないとって不平をいう。これは間違っていた。私に合うようにと、神が用意した量りを使って賜物が量られて賜物を与えられました。

3) 異なるから美しい

そうするとどうなるか。二つのことが言えます。一つ目。神の量りが違うと言うことを聞いて、皆さんはこんなふうにしたのではないか。「あの人にはたくさん与えられているのに、私には少ないのはどうして? 神の量りは不公平だ。」

ところがよく考えると、そもそも神の使っている量りがみなそれぞれ違うのですから、ほかの人と自分を比べても意味がない。どうして量りがひとり一人違うのかと不思議に思うかもしれません。反対のことを考えてみてください。全員が同じひとつの量りで量ったらどうなるか。この世界にみな同じ人しかいないことになる。それは楽しい世界でしょうか。ひとり一人の量りがちがうことがこの世界を美しくしている。いろいろな個性豊かな人たちが関わることによって、キリストのからだ建て上げられていく。これが教会です。

4) 身丈を量るものさし

そして二つ目に言えることとして、ここで13節を取り上げます。実は、日本語訳には出て来ないのですが、ここに「量り」ということばが使われています。意識すると次のようになります。「賜物を与えるときに使った量りで、私たちの身長を日々測ります。そうすると、ある日、キリストの身長にまで十分に達するようになります。」

この意味するところは意外なものです。賜物を量る量りが違えば、身長を測る量りもそれにあわせて違うとっている。仮にあなたを量る物差しが小さかったとしたら、キリストの身丈を量る物差しも小さくなるので、そういう人はキリストの身丈に早く達することができる。これはうれしい知らせです。

5) 信仰と知識において一つとなる

最後に、どのようにしてキリストの身丈に達するのを目指すのかについてまとめます。13節に「神の御子に対する信仰と知識において一つとなる」とあります。罪を犯した私たちを主が十字架の恵みによって救ってくださった。このことをなんども思い起こしながら、私たちはじょじょに大人になり、一つとされていきます。このようにしてくださる主とともにまた歩んでまいります。